

第1回体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 畠中 小清水 河野 岡田 山本 関川 藤井 坪根 土屋 小松
満山 古川 高岡 戸澤 奥水 宮内 高橋 東 吉池 濱須 大川

常任理事 佐藤校長

I 研究の方針

(1) 今年度の部会の運営について

- ①直接集まる会議とオンラインを活用した会議を活用して、研究を深めていきたい。
- ②一期一会を大切にしていきたい。
- ③宿題の資料は前日までに PDF 形式で共有していく。

(2) 研究主題

「一人一人の子供が自ら深い学びを実現していく体育学習」

研究の視点「一人一人の子供の自己評価の力を高める手立ての工夫」

(3) 昨年度までの研究の成果と課題

研究の視点1 子供一人一人が自らの学習課題を見いだすための手立ての工夫

研究の視点2 子供一人一人の多様な学習課題を解決していく学習過程の在り方

その他の研究主題に迫るための工夫 ①教師の働きかけ ②新たな運動例の設定 ③運動アプリの作成

令和3年度の研究の成果と課題		
	成果	課題
研究の視点1	○単元の始めから、全ての運動を選択できるようにしたことで、一人一人の子供が自ら学習課題を見いだすことができた。 ○プロモーションムービーを視聴し、「やってみる時間」を設定したことで、子供が意欲を高め、見通しをもって運動に取り組むことができた。	●具体的なポイントを意識して、運動に取り組むための手立てが必要であった。 ●異なる運動の中で、共通するポイントや学級全体で共有したいポイントを精選する。
研究の視点2	○3時間分の簡単な見通しを立てることで、試行錯誤しながら、目的意識をもって学習に取り組むことができた。 ○学級全体で共有する個別の学びの成果や課題について、何をいつ共有するのかを明らかにすることができた。	●子供によって選択する運動に偏りが見られた。体力の4要素に取り組むことができるように示し方を見直す。 ●学習過程の適切な配当時間を検討する。 ●子供同士のかかわりの内容と場面を明確にして示す。
その他	○新たな運動例を設定したことで、子供が意欲的に取り組む姿が見られた。 ○運動アプリを作成したことで、子供が自ら学習課題を解決するための手立てとして活用していた。	●子供が意欲的に体の動きを高めることができる運動例を作成する。 ●運動のポイントや工夫なども網羅できる、運動アプリを作成する。

(4) 令和4年度の研究の重点課題

- ①個別最適な学びと協働的な学びの一体化
- ②一人一人が深い学びを実現するための指導と評価
- ③支援が必要な子供への働きかけ

2 グループ競技

(1) 「子供が『する』自己評価活動」について

- ①自分の学習を振り返って次の活動に生かす活動であり、そのための方法はタブレットの活用、ルーブリックの評価の活用などがある。
- ②自己評価と振り返りは区別した方がよいのではないか。
- ③自分の行った行動の結果を効果的に次の活動につなぐ力だと思える。
- ④できるためにどうするか考える姿のとして、自分の行動の修正も含める必要がある。
- ⑤自分の動きを撮影して、できる・できないを判断する姿、自分の姿を運動中にどのように見つめられるようにしていくかが大切だと思える。
- ⑥自分の行動を言語化できることが、次の活動へつなぐカギになると考える。

※ 子供が「する」とは？ メタ認知というキーワードと結びつくのではないかな？

(2) 体の動きを高める運動における自己評価活動とは？

- ① 自己評価活動とは何なのかを明らかにしたい。何のために「自己評価」するかについては、自分の課題をクリアするため、運動の目標達成のためなどの姿が考えられる。一方で、子供は、「自己評価」について、学習中の自分の動きができたのか、できていないのか、もっと工夫できないのか、など運動の行い方子供は偏るのではないかな。

よって「自己評価」を運動面（技能面）に絞ってみていくのか、もっと「自己評価」という捉えを広げて研究していくのか、今後「自己評価」の捉え方について検討が必要である。

- ②いつ自己評価をするのかについて、短期的な自己評価として運動と出会いどのように運動を行うかという姿側面と、長期的な自己評価として単元を通しての学び方の変容について見付ける姿があると考えた。

目に見えるもの（量的な変化）、目に見えないもの（質的な変化）について自己評価していく姿があるのではないかなと考えた。

自己評価（自分が変化）したことを言語化して共有していくことで、どんどん思考力が高まってくと考えた。

- ③ いつ・どこで「自己評価」するのかについては、運動中と運動をした後に振り返る姿があると考えた。また、学習の最後に、次の学習の時間につなげる「自己評価」があると考えた。

誰が「自己評価」するかについては、自分が「自己評価」する姿と仲間と一緒に「自己評価」する姿、子供たちが「自己評価」しやすくなるように教師が働きかける姿があると考えた。

なぜ「自己評価」するかについては、できるようになりたいという思いが原動力となると考える。その運動をできるようになりたい、目標を達成したいと思える運動例の開発が必要であると考えた。

どのように「自己評価」するかについては、単元の最後に行うことが「自己評価」しやすいのではないかなと考えた、ただし、視点をシンプルにする必要がある。例えば、「できたこと・できなかったこと・次どうしたいか」などにすると子供が「自己評価」しやすくなるのではないかなと考えた。

運動中は、仲間との対話や教師との対話、自分との対話（自分の動きの変化）で「自己評価」する姿が見られると考えた。

- ④ いつ「自己評価」するかについては、学習中は常に課題を意識して行っていくと考えた。その際、発問を受けて考えるきっかけがあることで「自己評価」する姿が深まっていくと考えた。

誰が「自己評価」については、自分の考えを個人で振り返って終わるのではなく、振り返ったことを誰かと交流することで思考が深まると考えた。他者からの働きかけや個人の問いに対して、達成されているのか達成されていないのか修正してもらうためにも他者からの働きかけは大切だと考える。

どのように「自己評価」するか、については、学習カードに残すことも考えたが、タブレットに動画やコメントを撮影し、その動画を他者と共有して交流することもできると考えた。また、文章ではなくキーワードを残し、そのキーワードをもとに仲間と交流して「自己評価」していくことも可能であると考えた。

何を「自己評価」するかについては、自己評価の対象は、自分はこれができた（これができた・できない）という思いを自己評価する（できたを自己評価する）ものだと考えた。

- ⑤ 交流することで「自己評価」する姿が見えてくると考える。

これまで体の動きを高める部会が行ってきた研究を価値付けていくことが大切であると考えた。

子供たちが自己評価「する」という視点を大切にしていかなければいけないと考えるので、子供たち自身が自己評価したくなる働きかけを教師はしていかなければいけないと考えた。

3 実証授業①について

実証授業「府中市立第六小学校」7月12日（火）に向けて、研究を進めていく。

4 常任理事の先生方より

河野先生

なぜ、「自己評価」という言葉を使ったのか？なぜ「自己評価」をやるのか、何で「自己評価」をやるのかを考えていくことが大切だと感じた。

自己評価と相互評価をキーワードにしていくと、子供同士がかかわり合いながら何に向かって自己評価していくのか考えていくことができると考えた。

小清水先生

塾や習い事では、学習カードは使っていない、なぜなのか？振り返りは行っているはずである。学習カードにダウトをかけてみてもよいかもしれない。

畠中先生

7月の授業をみんなで見て、今後の研究を深めていきたい。

佐藤校長

子供は、何の情報（何の刺激）について自己評価をしているのか（振り返り・気づきが生まれる）検討することで、今年度の研究をどこに焦点を当てるべきかが見えてくるはずである。今日の部会はとてもよい話し合いができた。

5 次回

5月26日（木）18時30分～20時00分 豊島区立池袋本町小学校
「実証授業①に向けて・・・授業内容 手立てについて」